

資料紹介

第一次世界大戦と在澳日本人の抑留問題（二）

梶原克彦
奈良岡聰智

目次

総論・解説

一 佐藤愛磨

二 城戸愛三郎（以上、第四十三号）

三 藤井慶乗（以上、本号）

解説

本号ではオーストリアで抑留された僧侶・藤井慶乗が解放の後に雑誌『東亜の光』へ投稿した回顧録ならびに藤井の消息をめぐり行われた新聞報道（『東京朝日新聞』と出身県の新聞である『神戸新聞』）を翻刻・掲載する。

藤井も私費留学生としてウィーンで学究生活を送っていたところ開戦を迎えた。そして約一ヶ月後、避暑を兼ねて訪れていたザルツブルク近郊ビシヨフスホーフエンで逮捕・拘禁され、その後、城戸同様にニードーエスターライヒ州ヴァイ

トホーフエン郡で抑留生活を送った。藤井の回顧録で特徴的な点は、捕虜とは異なる問題としての〈民間人〉抑留への言及である。そこから日本と「国際法」との関係に思いを致し、またその関連で、利害・利益代表国であったアメリカが解放に向けて果たした役割や様子にも論及している。ところで、民間人抑留者問題が捕虜と異なるのは、その抑留箇所や安否確認方法が条約のあたりで当時確立されていなかった点である。そのため親類縁者などには藤井の消息は杳として知れなかった。その意味で藤井に関する新聞報道は、所在も定かならぬ状況での貴重な情報源を提供する一方で、藤井本人の思惑とは異なる状況説明を親類縁者へ伝えることにもなった。第四十三号所収の佐藤愛磨の記事と併せて、藤井の手記と対照されたい。

【凡例】

なお翻刻に際しては、以下のルールに依った。

・適宜段落を整理し、句読点や中黒を補った。

・漢字は原則として新字体を用いた。

・同一資料内で表記が揺れている場合、編者が統一した場合がある。

・〔 〕 および 「 」 の記述は、編者が付したものである。

三 藤井慶乗

① 「行衛不明となつた本県出身の医学士と文学士 避難したか拘禁されたか 杳として何等の便もない」〔神戸新聞〕一九一四年九月十三日¹⁾

日独開戦当時まで慥かに独逸に在留してゐた筈で、その後行方不明となつてゐる邦人が四十七名あるといふ。而もその大部分は独逸官憲の手に拘禁されてゐるらしいといふので、先に我が政府は、米國政府に釈放の交渉を依頼するに至つたが、まだ渺々しい結果を得る能はず、そのまゝになつてゐる。その四十七名の行方不明者中に本県下の人が二人ある。市内兵庫西柳原町六十四番明城彌之吉氏の令弟医学士明城彌三吉(三十八) いま一人は県下六栗郡河東村の内須賀村真宗本派願壽寺住職文学士藤井慶乗氏(三十二)との両氏で共に杳として消息なく生死のほどすら判らないので家族の人達は何れもその身の上について日夜心配してゐる。

▲夢の間も忘れぬ 藤井文学士の母堂語る

又六栗郡須賀村の願壽寺では藤井氏の母堂ふじぞ刀自(六十

八)が憂慮の面持しつしめやかに来訪の記者に左の意味のことを語つた「慶乗からの最後の便りは先月八日に着いた葉書一枚でしたそれは勿論開戦前のことですから別に変つた消息ではなく、唯「壯健で暮してゐる」といふこと、自分が世話になつた独逸のキーベ博士が伯林へ帰られること、なつたので博士の勤続二十五年の記念品として日本の扇を贈呈したいと先日その送附方を頼んでやつたがその手紙は着いたか、仕うか、扇は待つてゐたが終に着かなかつたといふ簡単な便りでした。これは七月七日附で維也納の大学から寄越したもので、この時分まで維也納に居たのですから、若しかすると何処かへ避難してゐるのではないかと思ひますが、何しろキーベ博士には厚いお世話を受けてゐたのですから博士の赴任と共に伯林へ行つたのが確らしく思はれます、さうすると独逸で囚はれの身になつて居るのが事実らしいので、実は明けても暮れても心配してゐるのでムいませ、元來私は慶乗を外国へやるといふことは不同意で、始めその話がでた時に「妾^{わたくし}が死んでからにしておくれ」といつて許さなかつたものでしたが、本人が仕うしても行きたいといひ、人様も種種勧めて下さるので許すこととなり一昨年(一九一三年)の九月二十六日に横浜から出帆の常陸丸で維也納に向ひ、維也納大学に學んでゐたのです、けれども倫敦には伴の学校友達で姫路の清瀬一郎といふ方も居られるし、お心安いシユミツト博士も居られることですから或は倫敦へ逃れてゐるかも知れぬと思つ

て、当にならぬことを当にして自分で慰めてゐるので「いまます」云々、と如何にも心配らしく語つた。慶乗氏は飾磨郡手柄村履信教校の出身で十六歳の春東京に赴き某私立大学に学んだが四年で退学し更に鹿児島第七高等学校に入学卒業後帝大の哲学科に入つて卒業、その後京都の仏教大学校に遊ぶ中、四川省成都の高等師範に教諭となつて、四十二年九月同地に転じ、翌年十二月帰国したもので、新潟の中学に教鞭を採つたこともある、一家はふじゑ刀自の外、姉きく子(四十)と、きく子(四十)の長女つや(三十)長男東洋男(二十)の四人暮しで、妹あや子といふのは他所へ嫁してゐる、氏とシユミット博士との関係は維也納大学在学中博士に日本文学と仏教について個人的に講義してゐたものであるといふ。

② 「死すとも帰らぬ藤井文学士 ▲行方不明の奇僧唯一人 奥国に止まる」(『神戸新聞』一九一四年十月二十一日)

この日一行中の大立者佐藤大使の話によつて今迄行方不明であつた本県出身の文学士宍粟郡河東村の内須賀村真宗本派願壽寺住職藤井慶乗氏(五十七)の消息を詳にする事が出来た、今度奥国太利には二十一人の日本人が居て大使から引揚命令に接し何れも愴惶として帰国を急いだ中に唯一人、死んでも帰らぬと頑張つた奇僧があつた、藤井氏その人である、同氏は開戦以來伯林に入つたのであるうかと故郷でも友人間にも心配されて居たけれど実はヂヤルツブルグ市、カトリック教のビシヨ

プスホーフ寺院に入り専心宗教哲学の研究に余念なきものであつた、元來同氏は非常に熱心な宗教家であつて独逸のキーペ博士を敬慕し遠く海を越えてかの地に渡つた程の人であるから戦争がたとへ何うあろうともビクつくやうな男ではなかつた、大使も親友もいろ／＼帰国を勧めたれど自分は宗教の精髓を究めぬ以上死すとも帰らぬ覚悟であるとして中々動きそうにもない、何といつても宗教家であると親友なども敬服して引き揚げたのである、所がカトリック教では同氏の生命だけは神に誓つて保護を加へるといふことで同氏は安んじて法の研究に一身を委ね砲煙も弾雨も専念修業の耳には入らぬといふ風であつた、かくと聞かば万里欧州の空に居る愛児の身の上を案じて居る家□の慈母が如何に喜ぶであらうか。

③ 「遺骨愛児を慕ふ ▲哀れ藤井文学士母堂の死」(『神戸新聞』一九一四年十月二十一日)

県下宍粟郡河東村の内須賀沢村願壽寺住職文学士藤井慶乗氏が宗教哲学研究のため目下雄々しくも唯一人奥国に踏留まれることは既記の如くなるが、茲に気の毒なるは氏の母堂ふじゑ子なり、ふじゑ子はかねて老の身の兎角に健康勝れず、ひたすら此の帰朝を待託つ、病床に臥し居りしが果然去る四日病勢俄に重りまた起つ能はざるに至りしが偶然にも同日氏がかねて欧州大乱前奥国より發送したる書信が九十余日を費やして到着したるより、家族の人々は直に母堂にこの由を伝

へ書信をその枕辺にて読み聞かせし処、母堂はいと嬉しげに耳を傾け口許に微笑の影を浮べつ、「慶乗慶乗！」と懐しげに繰返したるま、終に□□六十八歳を以て不帰の客となりしより家族の非歎一方ならず、この旨を氏に急報せんとするも戦乱のため通信の便なく何れも思案に暮れ居りし処この程かねて氏が塙京維也納滞在中懇意になしたる独逸医学博士シユミツチ氏日本美術及び仏教研究のため京都ホテルに滞在中なるを聞きせめては博士に面会してこの次第を告げたらば又よき方法もあらんかと慶乗氏の実姉さく子は十五日博士を訪れ通訳を介して右の趣きを語りしに博士は太くこれに同情し直に塙国と通信の便ある瑞西の知人数名に向け藤井氏に伝ふべき書信數通を發送し尚年内には博士も帰国すべき予定なれば何品にても托されたらば氏に送り届くべしとの親切なる言葉なりしかばさく子の喜び一方ならず、かねて携へ行きたる母堂の遺髪並に遺骨を取めたる小箱、母堂病臥中の写真、葬儀当日の大型写真その他数点の品を托しそくとして帰郷したるが母堂の遺髪遺骨は藤井氏が帰朝の途次印度に立寄り釈尊奉祀の寺院に納むべしと。

④「日独学者の奇縁」▽在塙藤井文学士▽母堂の死の通
知」(『東京朝日新聞』一九一四年十一月二十日朝刊)

兵庫県宍粟郡河東村の内須賀村願壽寺僧侶文学士藤井慶乗氏は宗教哲学研究の爲め雄々しくも唯一人我敵国たる塙国に

踏み止まるが同氏の母堂ふぢゑ子は本月四日午後二時病氣危篤に陥りし時偶然にも氏が欧州大戦前

▲塙国より發送 したる書信九十余日を経過して到着したるより直に瀕死の母堂に此旨を伝へて内容を読み聞かせしに血の氣失せたる顔にいと喜ばしげなる微笑を見せたる儘六十八歳を以て永眠せり、然るに母堂の訃を氏に伝ふる術なく一同如何せんと苦心せる折柄独逸人医学博士シユミツチ氏が日本美術及仏教研究の爲京都の都ホテルに滞在中なる記事本紙に見えたるを氏の実姉さく子が思ひ出で之を頼りに去る十五日都ホテルに

▲シ博士を訪ひ たり茲に奇なるは此シユミツチ博士が来朝せし動機は博士が維也納に在りし当時藤井文学士亦恰も維也納大学に在学中にして博士の依頼に応じ昨年十二月まで日本語を教へたり夫より博士は愈々日本來遊の決心を為せしかば氏は博士の爲に高橋順次郎博士塚本京都府内務部長釜尾奈良駅長等へ紹介状を認め遂に本年三月博士の來朝となりしなり而して博士は来月初旬横浜出帆米國を経て一先ず帰国せんと爲し居る折柄ならば今懐しき

▲日本語教師の 実姉の來訪を受けて心行くまで物語りを爲し母堂の訃は塙国と通信の便利ある瑞西国の博士数名に宛て藤井氏へ伝ふべき書信を發送し尚届くるものあらばとのことにくゑ子は母堂の遺髪並に遺骨を納めたる小箱、母堂病臥中の写真、葬儀の写真其他数点を託し名残惜しくも袂を別

ちて帰宅せりと。(神戸電話)

⑤「楚囚艱難録」(『東亜の光』第十卷第七号、第八号、第九号、一九一五年)

大正三年九月十八日在留敵国人として独逸国境にて捕らへられて以来、アルペン山麓の月、ドナウ河畔の雪を友として、楚囚艱難、半歳の長きに及ぶ。今思ひ出多き数節を採録して、東亜の光に寄す。

大正四年四月十五日諸行無常と告げ渡るソルボン礼拝堂の鐘聲を聞きつゝ、巴里羅荷街バンテオン祠畔の寓に於て識す。

発端

大正三年六月二十九日の午後三時頃と思ふ、僕は先週より維納大学神学科教授学生の催せし羅馬巡礼隊に加り、バチカン宮で先代法王ピラ十世殿下に謁して二十八日夕水の都ベニスに着し、翌土曜日二十九日名物のゴンドラを漕いで遊んで居った時、サン、マルコの広場の前に来ると、非常なる群集で何か号外を読んで居る、見ると奥国皇儲フランツフヘルジナンド及妃殿下が御二人共ボスニヤで暗殺され給ひし凶報で有る。是が有史以来の世界大戦乱を引き起し、欧州全土殆んど硝烟弾雨の修羅場となし、尚足らずして遠く南米の波上果ては東亜の一角迄、血雨腥風に汚したる大事件を起した抑もくゝの発端で有る。嗚呼悪むべきはスラーブ族の毒牙の犠牲となり、果敢なくもサラジエボの露と消へられたる両殿下で有る。思い起す六月二日の午後僕は維納ブラーターの花祭

を見に行つた。美しい花で一杯に飾られたる幾百台の花自動車^{オモトリ}が列を作りて通りた後に群衆の唱へる万歳^{ホウサイ}の内を靜に花自動車を進められ、サモ愉快氣に挙手答礼しつゝ、過ぎられた両殿下の御顔が今に尚脳裏に残つて居る。越えて七月三十日恰度僕等の一行がトリエスト港に着いた時に恰も両殿下の御遺骸を軍艦メツテルニツヒ号が乗せて来て揚陸する際で有つた。碇泊の諸船、何れも半旗の弔礼を行ひ、ドンヨリした天氣は一層悲しさを増した。維納から來られたカージナルのピツブル博士の捧げられた祈禱に連れて僕等隊員も助音^{オモトリ}して最後に ora pro nobis と唱えた。実に極まりなき人事の変転果敢なきは人の身の上で有る。然し此の際何人も是が数句の後恐るべき世界戦争を引き起す原因になるとは知らなかつたのである。

斯くて七月中旬から中欧の天地は何となくザワ／＼して來た。千八百六十六年以來未だ火薬を燃した事のない奥国陸軍も俄に活氣を呈して來た。塞国(セルビヤ)公使館は警察隊で堅固に警固された。外務省陸軍省の各階の窓からは電燈深夜迄輝き、外相ベルヒトールド伯の自動車は幾度かシエーンブルンの離宮に飛んだ。独逸首相ベツトマンホルウエヒ氏は微行して維納に來た。果然二十六日奥国公使は塞国の首府ベルグラート市を引き上げた。引續いて最後通牒が発せられた。夫からは維納市は更に活氣横溢。凡てのレストラント、凡てのカフェー、何れも此の話で持切り

だ。外務省、陸軍省、市役所の前は黒山の様な群集だ。何れも口々に埃国ホホゼステルライヒ万歳、塞国を倒せ、(nieder mit Serbien)を絶叫して、楽隊は「プリンツライゲンリード」や、「ラインの守り」や果ては国家を奏して景気を付けて居る。二十九日の朝は早くも市内至る所で、クリীগスエヤクレールトく(宣戦布告)との声高く、午後に至りて弥々皇帝フランツヨセフ一世の名で宣戦が布告された。面白いのは此の宣戦の詔勅(Manifesto)が市中至る所の壁、果ては辻便所の戸に迄、フランツ帝の名の有るのが貼り付けて有つた。引続いて大動員令(Allgemeine mobilisier[un]g)が出た。夫からは維納全市は沸え返る様な大騒ぎだ。毎夜幾百千の群集は隊を組み、国旗を立て、鳴物入りの愛国示威運動を初めて、皇城、陸海軍省、外務省等の前又は市の広場前に至ると、皇帝万歳、スラーブを倒せと絶叫して居る。此際僕は特に読者諸賢に告げたきは当時一般独逸人種は伯林でも維納でも日本に對して非常に尊敬を払つて居つた。埃国と露国とは年来の敵で、早晚衝突の起るは明な事である。スラーブ人種は実に独逸殊に埃国の悪むべき敵である。夫故に日露戦後日本人が維納市で厚く尊敬せられ、歓迎されたのも明かに其の辺から来て居る。今度でも維納などでは日本が独逸と携へて露国に對して必ずモ一度打撃を加へるに相違ないと思ふて居つたらしい。夫故に僕等が市街を散歩しても、カフェーに行つても、至る所でブラボウヤパーナー、ホホヤパンである。或る日僕

は偶然維納南停車場に行つた事が有る。其の時分はセルビヤ出征の軍隊を輸送する汽車計りで有つた。僕は一寸帽子を取りて軽く会釈すると兵卒と云はず将校と云はず一斉に窓から首を突き出し、ホホヤパン、ホホミカド果てはホホゲネラルクロキ、オホヤマと来た。のみならず、見送りの群集迄が声を合して日本万歳と叫び、中には握手を求めて、口々にドウゾ日本の兄貴、東の方から露助をウント云はせて呉れ、シツカリ頼むぞなど云ふて居る。電車に乗りても乗客が争ふて席を譲り、街頭に立つお巡りさん迄、日本人を見ると、ニツコリ笑ふて拳手敬礼。イヤ早や持てる事夥しい。話は少し古い
が維納市民の対日本人の好感情の一例としてモ一つ当時居られた眞鍋嘉一郎学士から聞いた事を附加へ置きたい。夫は先年明治天皇陛下が御重症に陥らせ給ひたる頃である。維納の各新聞は世界の偉人として一斉に御肖像を掲げ、御容体を記載する。此の時分は日本の留学生がレストランに行つても、散歩をして居つても、見も知らぬ人迄が丁寧挨拶して、ミカドの御病氣御同情に堪へずと云ひ、弥崩去の日などは
遇う程の人が日本人に握手して imigen Beleid (厚き吊意を表す)と云ふたさうである。此の熱心なる同情と尊敬が、二三週間後にはガラリと一変して、ブラボウヤパーナーが變じて
黄い鬼ゲルヒトクワイエよ、ホホヤパンが化して汝豚ツシライイとなり先きに大持に持てたレストランやカフェーで黄色人入るべからずと来たので有る。

不幸なる避暑旅行

八月一日の事で有る。其当時維納市は例年になく大暑で有つた。戦争の爲め大学も夏のセメスターが終るより引続き凡ての建築物は陸軍病院となりた。僕の仕事をして居りた東洋学部も閉鎖された。僕は此の時二月以来維納心理学会から頼れた福来博士の「透視と念射」の翻訳も大苦心の末ヤツト出来上りたから残りは暑中休暇中の仕事として、先方に引渡し秋には出版の筈で有りた。(序に此のアルバイドに於て萊府に居られた野上俊夫君マルブルクに居られた大河内常一君の諸先輩に負う所多し) 次の秋からの仕事として維納大学で大変恩顧を受けたフェルスター教授 (Prof. F. W. Foerster) (有名なる教育学者でクラーク大学のホール博士と並び称せられる人で東京大学の吉田教授を能く知りて居られる) の名著の一二を日本訳する考へで当時ミュンヘンに住んで居られる同教授を訪問避暑旅行をする目的で一日の夕ミュンヘンに行つた。此の時はミュンヘンも戦争の爲め大した景気。大学の学生、ドチエント連も皆武装してバイエルンの聯隊に入り、市内は恐しく活動して居る。八月の四日の夕僕は多年お馴染の王立醸造場 (Müchener Hof-Brauerei [Breuerei]) を見舞ふた。恰度此の日は伯林で帝國議會ライヒスタットが開かれカイゼル陛下の有名人なる驀進演説 (Durch dick und dünn) の大気焔の挙つた日だ。ザロンは一杯の人で手に手に例の素焼きの器から黒ビールの泡を立てながら大気焔。僕は茲でも盛んにブラボウを浴

せかけられた。

八月五日僕はミュンヘンを去りた。其の際フルスター教授より一通の紹介状を貰ふて、帰途ザルツブルク附近の或る修道院クオースルに居られる或るガイストリツヒの大家を叩き、避暑兼ねく不足して居る僕の羅甸語の補習をやる考へで有りた。院の位置は恰度アルプス山の半腹位の所に有りて、実に山水秀麗。少し上ると遙に瑞西の諸山を望み、双眼鏡を上げるとユングフラウの白い御化粧した頭が見える。院は普通の修道院とギムナジウムを兼ねたもので、当時僕の外避暑に来て居りた独逸の学者、音楽家なども居りた。僕は維納を去る時もミュンヘンでも新聞紙は折々日本の局外中立は日英同盟の爲め頗る怪しくなりて来たと書いて居りたが、マサカと計り確信して居つた。其内疾風迅雷の勢で独逸は対英、仏、露、果ては生意気な白耳義迄が喧嘩を売り出した。斯くて欧州の各列強は伊太利が中立した後は全部独逸人種を取囲み袋叩きにする勢となりた。此際独りタイムスの嘘八百の電報計りでなく、又伯林電報計りでもなく、公平に考へて見れば、英外相グレー及宰相アスキスなどの仕打ちは決して彼らの誇るゼントルマンの態度でない丈は確実で有る。然し此時最も僕の驚いたのは独逸魂即ちフハーターランドの語の、エライ事である。僕は決して愛国心は大和魂を持って居る日本人の専売特許ではない事丈が分つた。然し何を云ふも山上の山寺生活。新聞の来るのも多少後れる万事浮世離れて静で有るから毎日

く坊さん捕へて羅甸の御稽古計りやつて居つた。

電報難

八月十六日に羅馬法王が遷化されて翌十七日の夕方と思ふ。一封の電報は僕の手落ちた差出人は維納駐在の日本全權大使佐藤愛麿氏で有る。電文は用紙三枚に涉りた長いもので有るが意味は大要次の如しだ。

在維納官私留學生は時局の爲め研究が不便になりしと本邦より送金が都合悪くなりし爲め、此際悉く帰朝する事に決議せり。貴下に於ても審思熟考、其の進退に關して違算なき様に御計らひあれ。一行は伊太利經由倫敦に向う筈。若し帰朝御賛成ならば、八月廿一日発の一行に加はれたし、而して若し旅費不足の諸君には倫動〔倫敦〕迄の分、本大使に於て御立替申すべきに就き至急申し出られたし。云云。

日本大使 佐藤ウイン

此の電報を握りて僕は大に考へた。ドウモ是丈では断然帰朝の決心が着かぬ。何故ならば此時分外交官こそ日独外交の既に險惡に陥りて居りた事を知りて居られるだらうが、留學生殊にコンナ山寺に避暑して居る僕に何が分りて居るものぞ。又僕は他の官撰や病院などより来て居る医者連の様に毎々本邦より送金を受ける者でもない。数ヶ年間の費用として持て来たものは銀行に預け不足の分はアルバイトで補ふて居る始末だから、本邦送より金の都合が善くなるも悪くなるも全然僕には無關係だ。又他の医者連はクリニークだとかイ

ンスチユートが閉ぢられたら困るだらうが、僕の研究機關は独り維納に限らず、至る所に有る。又此の電報が紙寄りの警告か勧告なら早速応ずる筈だが文面に有る如く留學生連の決議で決して大使の勧告でない。従て僕は留學生連位の決議にハイソードスカと従ふて軽々しく帰朝する考えにはならなかつた。愚痴を云ふ様だが此の時コンナ外交的辞令計りを并べて要領を得ぬ長電（日本語の）でなく手短に直ぐ維納に帰れと丈打て有ればタシカに僕は半年余捕虜生活は免れたに相違ないと思ふ。是は余談で有るが漢堡の日本総領事館から附近に旅行中の同胞へ出した電報が頗る振ふて居る。曰く、

ミスター、イクサハジマル、スグニゲロ、流石の独逸官憲も是を全く尊称付きの姓名と判りワケなく配達したから皆無事に逃げたソダ。此の維納大使館の不得要領の長電を受取りたのは独り僕のみでは無い。先年から通信省より留学を命ぜられて居る中村と云ふ法学士も同じものを貰ふた。然し幸ひと君は維納近くのリンツ市に居られた。此の電報丈ではドウモ断然帰朝の決心が着かぬ故早速ドウウ河の汽船（汽車は此の時分モウ敵国人は一人も乗るの不能）で維納に帰り、大使館に駆付け大使の口からヤツト様子を探り、早速引き上げられた。此の時君は其の電報を当時奥国大使館附武官たりし金谷歩兵大佐に示した。大佐は常に任侠を以て留學生間に鳴る人で有るから、痛く此の電報を見て憤慨し、コノ危急の場

合に何も外交上の事を知らぬ留学生にコンナ愚図／＼した電報を打つ奴が有るかと思はれ、早く藤井にも知らせてやれとて自ら僕に打たれたそうだ。然し残念ながら其報知は僕には来なんだ。此の話は瑞西で聞いたので有る。斯くて通信省着は二十一日一行に会して途中随分各大停車場でキワドイ曲芸を演じながら、ヤツト国境を越えて伊太利に逃げ込まれた幸運児で有つた。僕も断然帰国の決心は着かぬもの、氣にかゝるから早速電報で大使に宛て残留しても構ぬか、ソレトモ是非引上げの必要があるかと尋ねた。さうして出来るならば一度維納市に帰り大使に会いたいと思ふたが、残念な事にはザルツブルクから維納迄は四五時の汽車時間を要し、ソレニ加へて当時奥国は大動員の真最中で汽車は全部軍隊輸送に当てられ、鉄道線路は五歩に一人の義勇兵、十歩に一人のランドスルム後備兵、殊に鉄橋には少くとも五六十人の歩哨が警戒して居る、夫も其筈七月末から八月初旬にかけてセルビヤの間諜で鉄道破壊を企て捕へられ銃殺されたる者が、ザルツブルク附近でも約十人以上有る。中には女装して自動車を飛して鉄橋破壊を計りたる者も有るとの事で、官憲が極力鉄橋を警戒するは勿論の事で、従て汽車に乗るのみな／＼容易の事で無い、最も一日一回又半官半私の牛歩汽車が出るが夫に乗るには何人も必ず警察官の許可証ペシマンナウツが必要で有るから、僕は自分でも行き人にも頼んで度々土地の憲兵隊へ出頭して下附を請ふたが容易に呉れぬ、又此の戦争の初から国内には通信

機関の検閲が非常に嚴重にて、内外人を問はず手紙は悉く開封して、警察官開封のレットル電報も其通で有る。殊に外人のものと来ては恐しく嚴重に取調べ、従て手問取る事夥しい。従て僅か三度出した電報に一度も返事が来ぬ所を見ると、局へ没収したらしいので有る。ソレヤコレヤで早くも二十一日朝となりた。此日僕は初めて日本の対独最後通牒を知りた。青くなりて是は一大事と思ふたがモウ遅い。汽車には乗れず電報を出す事も出来ず、実に如何うする事も出来なから、エトマ、よと度胸をすへて居りた。後で聞くと独逸では、既に八月十九日の朝から伯林政府の電命で最後通牒の期間の切れぬ内から、日本人の捕縛を初め、伯林などでは急を聞いて、ケーニヒプラツの大使館へ逃げ込まうとした連中は多く門前を警戒して居る警察官に捕へられた。大使館の門内に一步でも這入れはモウ、日本の領地同様で有るか、門前一步は残念ながら独逸領土権の行れる所だから、此の悲劇を二階から臨時大使の船越参事官が見て居りて、手に汗を握りながらドウスルも出来なんださうだ。又和蘭へ逃げ出した連中はモウ一時間で国境を超えると云ふ「クレーフェルト」附近で、武運拙くも停車場備兵の手で黄い奴降りると引きづり降されたさうで有る。維納ウィナでもカフエーに這入るとオーバーが君は日本人か支那人か、日本人なら早速出て行けよと突き出された、夫から今日に至る迄維納市では支那人は何れも胸に五色の民国旗の小さいのを刺して居る。日本留学生の内では

群集から取囲れてなぐられたり石を投げられたりした連中が多いそうである。夫も其筈伯林でも維納でも露人やセルビヤ人で群集から半殺にされた者は少くないのである。然し奥国は只独逸の親善国で同盟者と云ふ丈で、只青島にカイゼリンエリザベツト艦が独逸に御味方して居る關係から、国交断絶になりたのであるから、独逸に比して多少猛烈の度が薄かつたヨ一だ、世の中は広い様で狭いもので有る。僅の捕虜生活中一月末で有つたと思ふ維納のライヒスポストと云ふ新聞に前記奥艦の捕虜水兵から越した手紙が出て居つた。題は日本に於ける我が捕虜水兵に対する武士的待遇 *Ritterliche Behandlung unserer gefangen See leute in Japan* として、其の待遇の意外に親切なのを心から感謝して、食事、住居、散歩何も不足はない、只日本政府は露国や英国の様に捕虜に何等の労働を課せぬから有りがたい事だが、タイクツで困る云云と書て居つた。此の水平等は僅の郷里に近き姫路市に居る。ソシテ彼等の本国には實に二人丈の日本留学生が捕へられ居る、其の一人即ち僕は姫路附近の者であるから妙である。

遂に捕へられる

斯くて対独最後通牒の期間も過ぎて廿五日には、駐澳日本大使一行も中立国たる瑞西へ引き上げられた。今は万事休すだ僕は考へた。日清及日露の戦争の際も日本では戦役の捕虜以外は一人の支那人も一人の露人も捕へた事が無い。今自分は一個の私費留学生で然も兵役には何等の關係もない者で有

る。それだから只引上に洩れたために残留したとて何等差支はない筈と思ひ、平気で午前八時から毎日く黒衣の坊さん相手に羅甸の文法と首引きして居つた。同居して居る多くの独逸人も奥太利人も喧嘩は国と国とだ、非戦闘員の君に何の責任が有るものだ、安心して勉強して居り玉へと慰め呉れ。散歩しても牧牛の百姓などが、君は外国人らしいがセルビヤ人ではないかと聞くから、イヤ日本人だと答へると、ウンソ一カと云ふ丈で何も変つた事はない。学校の小使なども新聞を読んで日本人が飛行器で青島へ爆弾をなげたソ一ダガ、何時の間にも日本にも飛行器が出来たかなど罪のない話。然し此の時分（九月初）は独逸軍は破竹の勢で英仏連合の弱兵（イヤ見た丈で傭兵は弱いしなものだ、英兵も見たか足の長い丈でトテモ実戦には駄目らしい、口の悪い独逸人は英人の足の長いのは逃げる用意だと云ふ）を打破り九月五日頃には既に当巴里を去る僅々日本里数の十里位の所迄来た。僕が今居る下宿の婆さんの話では、此家などに居つても砲声が手に取る様に聞へ、大統領ポアンカレー氏以下はポルドウ府へ逃げ出し、市民も過半避難して、「ガルテリヨン」などの停車場は踏み潰ぶされる様な人出で有つたソ一ダ。巴里は全く籠城の準備して、元氣な男子のみ残りて居りたと云ふ話だ。独逸の各新聞は毎日普仏戦争当時奈翁三世がビスマークに御辞儀をして居る所を写し出し、毎号大文字で巴里へ巴里へと題し、盛んに景氣を付けて居る。イヤハヤ豪勢なものだ。奥国

とは益親善になり、毎日ウイルヘルム帝とフランツ帝とは祝電の交換、奥国では上は大臣大将から下は一兵卒一小児に至る迄悉く胸に丸い徽章を付けて居る。表面の丸い内に独帝と奥帝との写真を出し、其下にラテン語で *Vivimus Unitis* 1914 [*Viribus Unitis* 1914] (親善なると同盟千九百十四年) の文字がある。是を帯びない者は外人計り、其の仲の善き加減と云つたらない。従て独逸の敵たる日本に対して同じく敵となつたので有る。当時僕は伯林の「ノルドドイツアルゲマイネザイツング」と、ミンデンの「ターゲブラツ」及び維納の「ノイエフライエプレツセ」を読んで居つた。何れも独逸一流の新聞で有るが、毎日〳〵日本の悪口の云ひ放題、殊に癩で有つたのは陛下の対独宣戦の御詔勅を訳出したのは善いが、其文中で無暗に疑問点や感嘆点を入れて冷かし仕舞に、太文字でミカドは悪むべき偽善者で有ると書いて居つた。今茲に当所一般独逸人種か日本及日本人に対して抱いて居た輿論の表本として、数多き内から左の手紙の一節を録する、是は維納の日本名誉総領事のフイツシャー氏から僕に送られた手紙の一節で有る。氏は独り維納市のみならず全奥太利のハンガリー全然に日本人の為め献身的に尽す事廿余年、其の實際的手腕は日本政府が高い給料を出して任命して居るソコラの外交官などよりズツト有るとの話で有る。

Lieber Herr Doktor — Hingegen kann ich Ihnen nicht verhehlen, daß die grossen Sympathien, welche früher in

Oesterreich für Japan bestanden, sich in ihr Gegenteil verwandelt haben, weil es unserem Fühlen und Denken ganz unfassbar ist, daß Japan, welches seine ganz militärische Ausbildung Deutschen Instruktoren verdankt, und dem Umstande, daß seine Offiziere in der Deutschen und der Oesterreichischen Armee eingereicht wurden, zum Danke dafür Deutschland eine Kolonie [Kolonie], die dieses aus seiner chinesischen Wüstenei in ein blühendes Einland verwandelt hat, einfach, weil die Gelegenheit gerade für einen Raub günstig ist, in wenig ritterlicher Art seinem Lehmeister wegnehmen will. Bei der gutmütigen Art der wiener Bevölkerung, die Sie ja wohlrscheinlich kennen, wird Ihnen also in Wien nichts geschehen, jenem sympatischen Entgegenkommen, dessen Sie sich aber früher als Japaner in Wien erfreuten, werden Sie aber kaum mehr begegnen. (3)

是の手紙の一節で凡その意向が推察する事が出来ると思ふ。
九。月。十。九。日。午。後。十。二。時。半。と。云。ふ。夜。半。門。衛。の。老。爺。は。慄。へ。な。が。ら。僕。の。室。に。来。り。ジ。ヤ。ン。ダ。ル。ム。ジ。ヤ。ン。ダ。ル。ム。と。云。ふ。て。居。る。僕。は。偕。て。は。弥。来。た。ワ。イ。と。思。ひ。早。速。着。物。着。換。へ。て。階。下。の。応。接。室。に。降。り。て。見。る。と、五。名。の。武。装。せ。る。憲。兵。が。来。て。長。老。に。對。し。て、僕。を。引。き。渡。せ。と。云。ふ。て。居。る。長。老。は。居。合。せ。た。ミ。ユ。ン。ヘ。ン。大。学。の。ド。チ。エ。ン。ト。な。ど。と。盛。に。國。際。法。を。説。き。人。道。を。論。じ。て、頻。に。弁。解。し。て。ク。ロ。ス。テ。ル。に。は。維。納。大。僧。正。庁。の。命。じ。た。も。の。の。以。外。警。察。

権は行れぬ所だと迄激論して居られたが、憲兵なか／＼承知せず、区知事 *Bezirkshauptmann* [*Bezirkshauptmann*] (日本官の知事と同じ位で司法行政共に行ふ者) の命令及守備隊司令官の囑託だからと云ふて動かない、仕方がないから僕はモウ是迄と覚悟を極め、多年棒持して肌身を離さなんだ本願寺明如上人執筆の六字尊号を堅く内ポケットに入れ、厚く長老以下に礼を述べ、告別してかばん片手に憲兵に連れられて門外に出た。長老や居合せた独逸人などは痛く別を惜み、翌日区知事へ向け出来る限り優遇してやりて呉れとの、嘆願書を差出したさうだ。僕は門を出てゾツトする程驚いた。門前には何時の間に来たのが奥国アルプス猟兵連隊の歩兵が約七八十名夜目にも夫と知らるる閃めく銃剣物凄く屯して居る。僕が出ると士官は何か号令すると一斉に僕の目の前に実弾を込めて、バラ／＼と僕の周囲を取り巻き、己れ一步でも逃げて見よ打殺すぞとの権幕、斯くて僕は五名の憲兵七八十名の歩兵に警衛されて、アルプス山麓の山道をかばん片手にトボ／＼と暗を冒して下りた。時は九月の中ば過ぎ夜露はシツトリと身に浸み、草葉にすだく虫の声も梢を誘ふ風の音も何んだか僕の悲しい行手を弔ふ様に聞えた。(未完) (以上、『東亜の光』第十卷第七号)

憲兵本部樓上の訊問

やがて一憲兵隊本部に着くと憲兵の下士は僕のカバン中に武器類はないかと頻りに探して鉛筆削りのナイフ迄取上げ、

夫から洋服のネクタイ、ズボン吊り、果ては靴の紐迄取上げた。聞けば先達同じく拘禁された仏国の若い男爵某は余り心配して気が変になり拘禁中首を吊りかけたからとの話、其晩は樓上の一室に僕を入れて堅く錠を下し戸外は三名の歩哨に警戒され、冷たきベッドの上に僕は初めて捕虜生活の第一夜を明かした。翌朝歩哨の持来れる一杯の黒ビールと一片のパンをと済まし十時頃本部樓上の大広間で、僕に対する予審訊問とも云ふべき公判が開かれた。丸いテーブルを囲んでズラリ居並ぶ有象無象数十名先づ正面に区知事のフホン何某、守備隊司令官の少佐、曰く憲兵隊長、警察署長、書記官、僕の背後には銃剣の歩哨十名鳴を静めて控へ居る態壯厳とや云はん、なか／＼以て心理学実験場の一室で毎年行はれる文科大卒業口述試験の様な騒ぎではない。区知事はこれより先き僕に対する取調べを初める旨を宣告し先づ初めに一封の電報を示して是は何かと聞いた。能く見ると先月例の維納日本大使から貰ふた長文の電報で有る。是は勿論僕に配達する前警察官が検閲して写しを取つて置いたらしい。此の際僕が大に遺憾とするは若しこの電報が独逸文で打つて有ればさしたる大事はなかりしを不幸にして書記官某君が御親切か気が利き過ぎたかで残念ながら用紙三枚の電報が全部羅馬綴りの日本語と来て居る。其内で只ロンドン、日本大使などの文句丈が欧語だから彼等にも分り敵国(英國)の首府の名前が有り日本大使などの名が有る以上は此奴曲者に相違なしとの疑を引

き起したらしい。僕は丁寧テイネイに全文を独訳して聞かせたが日本語を毫も知らぬ彼等の事とてなか／＼承知しない。僕が弁解すればする程益彼等の疑を増し互に怪しげな目付でコソ／＼話し会ふて居る。癪イラカに障る事夥しい。遂に区知事は咳一咳して長々の説法を初めた、大要は凡そ次の如しだ。

日本人と云ふ奴は実に仕方のない人種で有る。実に忘ワシヤル恩の徒で有る。能く考へて見よ、今日日本の眞の文明的知識は抑も誰から学んだと思ふ。今日日本の一般科学殊に医学などはドコから来たと思ふか。今日日本が世界に誇る陸軍は誰の手引きで完全なる組織を得たか。日本は何故毎年幾多の文部留學生を独逸に出すか。何故幾多の學生は学問修行に独逸へ来るか。実に独逸は日本の先生様だ。其の恩師に対して悪むべき英国の手先きとなり、自己の領地でもない膠州湾を横奪せんと企て、遂に盜賊の様な事をやる、不埒千万な黄色人種よ、黄い鬼よと罵り、果クは独逸語で最も人間を侮辱する言葉である汝ツシマ豚ブタよと迄叫んだ。此迄は僕も多少一理ある議論と思ふから御最御最ゴゴと謹聴キンテイして居つた。すると区知事奴調子に乗つて曰く、実に日本皇帝は偽善者である。汝のゲスタルトから察する所、汝は日本の予備の将校で有るらしい。何か日本大使の秘密訓令を受けて残留し居るならん。どうも日本の間諜スプレインらしい。速に自白して仕舞へ。隠すと間諜として処分するぞ。早く云ふて仕舞へ夫が汝自身の利益だと来た。其上に尚一名の秘書らしい奴が其の電報を持って来

て僕の頭へ乗せて打つ眞似をしたから、事茲に至りては元来短気な僕たる者堪忍袋の緒が切れざらんと欲すると雖も豈に得べけんやである、直に其の電報を引たくり何するかと床に叩き付けもう是迄と大声を張り上げ、汝等も人間ならば少し考へよ、僕は一個の留學生に過ぎない。只大使の電報が延着して引上げに洩れたため残留して居る。外交上の問題など僕の知つた事で無い。此の罪のない一日本學生を斯くも大袈裟に拘禁し、其上に恐しい云ひがかりを付けやうなど、は実に怪しからぬ。汝等の思ふ如く果して日本の軍事探偵の嫌疑が晴れぬなら、此場で銃殺するなり突き刺すなり勝手にせよ。汝等の信ずる基督は罪なくして十字架に上げられた。日本人は決して、死を恐れる様な弱虫でないぞと怒鳴つた。正直に云ふと僕はタシカカ殺されるものと思ふた。何んでも二三日前一名の露国人で維納大学の學生が間諜の嫌疑で捕へられて殺された。此の当時は全く法律も何も有つたものでない。苟も間諜の嫌疑の有る者は必然的に銃殺する事になつて居るさうだ。然し幸に暫く後に有力なる保証人が出来た為めに僕は助かつた。僕が余りヒドク怒鳴つたので彼等は定めて怒るならんと思ふて見て居ると守備隊司令官の老少佐は先づ言葉柔かに静かにせよへールドクトルとニコ／＼して曰く、何事も能く判つて居る／＼マーマーソー怒るものではない。静に／＼と云つた。其日は夫で取調べ終りとなつた。

アルペン山麓古城の幽囚

訊問は其日一度限りで済み及第とも落第とも分らぬ間に二三日経たる後僕は憲兵本部から連れ出され町から可なり離れて居る山麓に在る古い城の一室に入れられた。城は羅馬時代に出来たもので、中世には騎士が住んで居り後ハプスブルグ家の時代になつてから修繕して長らく空家であつたのを戦争前からアルペンス獵兵連隊^{アルペンス・カレキント}の兵營になつて□る。其の建築の羅馬式で眺望の善い事、壊れか、つた土壁に葛がのびくと生えて居る所など頗る詩的で有る。何んだか僕は歴史中の生活をする様な気がして、若し住んで居る獵兵が中世の軍服を着てミンネゲザングでも歌ふて呉れたら尚面白からうと思ふた。僕は此の城でズット離れた所に一つ有る士官用の一室を貰ひ毎日午前は本を読んだり午後は城壁に上りてアルプスの白雪を仰ぎ又庭などを散歩し□居つた。頃は既に十月、秋酣にして毎夜皎々たる明月が山麓一帶を隈なく照り渡り、時に破れた城壁を通して僕の寢室の鉄室を洩れて水の如き月光のさし込む時万感交々起りて禁ずることが出来なんだ、然し月の賞すべきは時にこそよれだ、天涯万里の敵国に捕へられ只一人淋しき古城の月を見るのは余り面白いものでない。僕の室外には何時も二名の歩哨が立ち散歩する時も便所に行く時も二六時中銃剣先生が御供して呉れる。然し彼等とても矢張り人間だ、人情には変りはない。或日一名の歩哨(五十近い後備兵)を懇ろに僕に話しかけて、ドクトル君は実に御氣の毒

だ、然し君には何の罪もないから其内放免になるだらう、此処の將校も非常に君を氣の毒がつて居るけれ共、上官の命令だからどうに□出来んと。更に声を潜めて曰く、君の通信は厳禁されて居る□れ共若しどこにか手紙が出したいなら僕が出して上げるとの話に早速鉛筆で手短に事の大略を書いて、二三の大学教授の所と親友の奥国砲兵少佐で今参謀本部に居られるロート氏とに手紙を書いた。此の少佐は先年日本にも来た事が有る人で非常な日本ブーキの人で独逸の外英、仏、露、伊の四ヶ国語に通じて居る学者だ。工科大学の大河内博士なども能く知つて居られる。スルト三日の後一名の下士は小包と一封の手紙とを持って来て呉れた。差出人はマヨールロートと有る。手紙を見ると少佐は痛く僕の拘禁を案じ出来る限りの尽力をするが、兎に角辛辣々々と書いて有つた。小包は煙草だの手紙だのチヨコレートだの本だの色々の贈物で有つた。所が翌日から僕に対する待遇かがらりと變つた。ペットが良くなる、錠が(室の)除かれる、歩哨が居なくなる、食事は士官食堂へ来い、城内庭園の散歩は勝手たるべしとの話。恐らくはロート少佐の御陰らしい。

俠氣ある老市長^{ヒュルゲルマイスター}

九月十八日に捕へられてから約一ヶ月、僕は此の古城に幽閉されて居つた。後になつて僕の与へられたる室は比較的奇麗なもので有つたが何と云ふても幾数百年前建築の古城で殊に僕の室は一般よりは遠く離れて居るから夜などは恐しく静

である聞こゆるものとは梢を吹く松風と下を流るる谷川の水温のみで有る。他には只時々夜十時に就床喇叭が哀れに寂莫を破つて来る位のものである。此頃僕は朝は早く起きて朝暉を拝し、此の方角が日本だと心陰かに聖寿万歳を祈り奉り、又日暮淋しい時などは遙に郷里に只一人生き残つて居られる母を想ふた。恰度此の頃は母は戦乱の爲め僕の事を案じて、既に病氣となられて居つた時分になるのである。午前はかばんの底から偶然発見したゲートの「ヴェルテルスライデン」を取出しラテンの文法に倦きたら毎日／＼ヴェルテルを読んで居つた。然しどうしても自殺する気にはなれなんだのは強ち僕はロツテの様な美しいのが国許にも何処にも居らなんだ為め計りで無い。食物は初め暫くは黒パンとジャガ芋のソツプで有つたが、後自費で買ふ事□許され、又土官用の食事も貰ふ事が出来た。

十月廿一日と思ふ、僕は突然此の城から出されて士官に連れられてザルツブルクの市役所ライトホフスに連れて行かれ其日から市役所の一室に起臥する事となつた。市長ヒルベルトは六十近い老爺さんで恐しい頑固人だが痛く僕に同情して呉れて、何んでも度々内務大臣ハイノルド氏に打電して僕を恐しい憲兵隊の手から引き取つて呉れたので有る。市長は日本の町村長と同じく一種の名譽職エーレンジツツで名望家が選ばれなかく、勢力を持つて居る。其の名をヨハンニツスと呼んで何時もニコ／＼して居られた。常に曰く、国と国とは敵だ。個人たる君は何の罪が有

らうか。僕は個人として忠実なる君のコレージュで有ると云ひ夫人も氣の利いた善い女性であつた。屢々宅に呼んで御馳走して呉れた。然し僕が一番心から感謝に堪へぬのは十月卅一日の天長節の日、夫人から来いとこの事に行て見ると一瓶の小さい葡萄酒と菊の花を呉れた。夫人は笑ひながら今年是不幸なる祭日シワラウツツヒツツイヤーで有るが飲で呉と云はれた、僕は驚いた夫人がどこから敵国の君主の誕生日を聞き出し、菊の花迄添へて僕の天長節を祝さしめんとは。僕は独り葡萄酒の杯を挙げ遙かに東に向ふて心陰に聖寿万歳と叫んだ時何故かホロリとした。大方前に僕が市役所の書記官と話をしたのを聞かれたからと思ふ。何れにしても感謝に堪へない好意で有る。散歩は毎日天気の日には市長と馬車を走らせ、又山靴をはいて能く山に登つた。食事でも市長の好意でホテルへ行つて相応なものが喰へた。何故市長が斯く優遇して呉れたかと聞くと、何んでも市長の一人息子が絵の修行に仏国へ行て居つたが今度の戦争で恰度僕と同じ様にポルドウ附近でやられて居るらしく、夫を思ひ出して僕を憐んで呉れたらしい。市民も唯一の日本人たる僕に対して左程悪感情を持って居らぬ。時々市會議員の人々から煙草や果物や、雑誌などを贈られた。然し十一月七八日頃と思ふ。青島陥落の報が伝つた時は、流石に人氣立つて居るからとて、市長は僕を自宅の奥二階に入れて警戒保護して呉れたが何の事は無かつた。又市長は僕に家族の事を聞かれた。僕は未だ独身者で有るが、国には一人の

母（父は疾く死せり）と二人の姉妹が有ると話すと夫れは母

公が心配して居られるならん、其筋では君の通信は許さぬが吾輩の独断でやるとして市の公文書を以て僕の拘禁一件及健全で居る旨を瑞西チユリツヒ市の日本名誉領事及び羅馬の大使館へも通知して呉れ、何卒同人の母親に安心する様打電して呉れと書いて送られた。チユリツヒ市の名誉領事ホーグリー氏は早速留学生某々氏に托して日本文の書面を十一月七日に出して呉れたさうだか悲哉僕の母は十月末より病益重く加ふるに其の時分神戸へ帰朝された維納大使の一行が出迎の新聞記者などに塊太利では藤井一人が大使の勧告に従はず勝手に一人敵地に残つて居ると話された其の談話が新聞に伝はり母は大に心痛し遂に廿日間も絶食して十一月四日午前十時頃トウ／＼死んだので有る。先日僕は瑞西チユリツヒ市で或る邦人の所へ寄越した姉の手紙を見て驚いた。僕の姉は痛く僕□罵り大使閣下の勧告に従はず勝手に敵地に残り其の爲め一人の母親を殺した。実に不孝極る愚弟で有ると恐しく憤慨して居る。

僕はザルツブルグ市ではそんな事は露知らず、相変わらず平気で捕虜の様な高等食客の様な極めて呑気な生活を送り、若し放免されぬものなら何時迄も此地に此の調子で止つて居たいと思ふて居つた。市長も又其の考らしかつた。所が運命の神はなか／＼質クチが悪い。僕は又しても恐しい目に遭はされたので有る。

再び古城生活—コロニー生活

十一月の廿日と思ふ、市長は不穏な顔して僕の室に来て、ドクトル誠に気の毒だが此の手紙を見て呉れと云ふから読んで見ると、是は又大変だ。夫は維納の陸軍省内戦時監督局 (Kriegsminister [] um Kriegsbewachungssamt) から来た公文で、日本臣民のドクトル、ケージヨウ、フジキを拘禁人 (Civil Internierter) として「ワイトホーヘン、アンデル、タイヤー」と云ふ所へ送るとの事有る。能く聞て見ると其処は独、塊、及ベーメンの国境に近き一の小さい町で有る。市長は色々運動して呉れ又維納ではロート少佐及フ教授もミュンヘンより維納へ毎度手紙を出して呉れたらしい。が駄目であつた。彌々僕は本式の抑留人又の名を政治的捕虜 (Civil Gefangener oder Politische Kriegsgefangener) として其地へ送られねばならなくなつた。十一月廿二日当時其辺は既に大雪で有る。アルプス風は身を切る様に寒い。僕は二名の憲兵下士に護衛されて降しきる雪を冒して馬車を停車場に飛ばした。市長及市の有志家、守備隊の士官など十数名見送られた。何れも心配せず、身体を大事にしゲツルト／＼と云ふて呉れた。市長夫人は道中が寒からんとて厚き毛布や羽の枕、果ては弁当など迄準備して呉れた。僕は紀念に此の毛布と枕を日本に持て帰る考で瑞西にも当巴里にも持つて来た。白い毛布も今は汚れて居るが僕は夫を後生大事と抱へて巴里へ着いた。出迎の人々は何か妙なものを持て居る随分巴里へ日本

人も多く来るが古毛布を大事さうに抱へて来たのは僕だけの話だ。

斯くて僕は二ヶ月の長き住み慣れた思ひ出多きザルツブルグを去つて東北へと進み、ドナウ河を越えて翌日の午前目的地のワイトホーヘンに着いた。其処は可なりの町で其処の区知事の役所 (Bezirkshauptmannschaft) が塙国で捕へられたる敵国人の監督官庁になり、知事が監督長官 (Gefangenen Oberkommando [Gefangenen Oberkommando]) となつて居る。僕と其日其処で落合ふたのは五名の英人と三名の仏人有る。二名の英人は牛津大学のマスター、ラブ、アーツで一人はタイムスの記者で有る。其の学者の一人はデヒス博士と云ひアペデイン大学の羅馬史の教授である。博士は交換教授としてブダペスト大学で夏のセミスター迄講義し、引続き歴史上のドナウ河を研究中を捕へられたのである。一人はスカラシツプで維納大学法科經濟部へ来て居つた人で、ブラウンと云ふて居つた。タイムスの記者はセシルローツ奨学資金でケンブリツチ大学を出た人で有る。仏人は一名は伯爵、後の二人はル、マタンの通信員、何れも揃ふて立派な人計りで有つた。後で調べて見ると、当時塙国では匈洪利を別として塙太利丈で凡そ五千人の対独敵国民が拘禁されて居る。是を六七ヶ所に分ちて収容して居る。年齢から云へば老いたるは六十幾歳 (是は露国の領事館の書記生)、小さきは二三歳の小兒、婦人、其内には伯爵夫人、男爵夫人なども居つた。職

業から見ると貴族、学者、新聞記者、僧侶、商人、学生等凡ての階級を網羅して居る。何れも開戦が急に突発したので引上げの機を失ふて無念の涙を呑んで捕へられたので有る。中に不思議なのは同じ旧教の僧侶で有りながら露国は希臘正教会 (Griechische Orthodox) で羅馬法王に属せぬ者故、可哀想に首に十字架を懸けた露国の坊さんが沢山捕へられ手錠をはめられて送られて居つたのを見た。羅馬教の連中もヒドイ事をするもので有る、国際法も宗教も道德も何も有つたものではない、敵国人と見たら女でも小供でも何でも片ツ端から引捕へて仕舞ふたので有る。此度の戦争は実に有史以来の大戦乱で、従つて幾多の犠牲を産んだが、其内で一番不幸な犠牲は全く此の種類捕虜で有る。戦争に依つて出来た軍人の捕虜に関しては既に幾度か万国会議や、国際法で其の法規慣例が規定され、最近では千九百六年和蘭海牙の万国平和会議 (是には日本から都築馨六氏が出られた筈) や羅馬市で開かれた捕虜に関する会議で、充分取扱法や何か規定されて居るから各国でも余り理不尽の事は出来ぬが、此の度出来た此の種類普通人の捕虜に就ては欧州各国まだ何等の先例もなければ規定もない。従つて各国で勝手次第の乱暴な事をやる今塙国で約五千人以上捕へられて居るが、敵国の普通民を捕へたのは独り独逸塙国丈ではない、欧州各国御互様で有る。各国互に競争して罪もない人間を只敵国人で有るからとて無暗に引捕へて居る。先づ現に英国では英本国は勿論加奈

陀、濠州、印度、南亞各領地で独逸人を悉く引き捕へ、英本國では愛蘭と蘇格蘭の間に在るマンと云ふ島に送り乱暴にも天幕の下へ約四千人の独逸人を押し込んで居る。又印度でもデルヒ其他で暑い炎天に此種の独人を苦役に使ふたと云ふ事の有る。此の事実は幾度か伯林のターゲブラツ及維納のプレツセにも出て居つて心ある米人なども一方ならず憤慨して居る。但しタイムス電報丈を唯一の海外通信と心得て居る井底の蛙然たる日本の新聞記者にはトテモ此の事実は分つて居るまいと思ふ。又仏國では西班牙のバルセノアから引き上げて来る独逸人の乗つて居る伊太利の汽船を水雷艇で取押へ、乗客の男子は悉くマルセー沖に有る「シヤトウデーフ」と云ふ島の岩石から出来た天然の牢屋に入れて居る。此の島は有名なるアレキサンダージューマーの小説モントクリストに出て来る島で、先年萬朝に黒岩涙香が巖窟王として訳出した事がある。露國では独逸人を捕へて遠く西伯利亞のバイカル湖附近に送つて黒パンと水のみを呉れて居る。夫故埃國に残留して居つた英、仏、露人などが捕へられるのは蓋し当然の結果で有る。然るに日本丈は流石東海の君子國とも云ふのか何処迄も博愛主義で現に日清の役にも一人の支那人をも捕へぬ。又日露の際にも一人の露人をも捕へた事がない。現に僕の尊敬するケーベル先生は戦時中平気で外国語学校で露語を教へて居られた。先生は大学を止めて既に帰國されたと云ふ事を聞いたが今は何処に居られるやら、若し先生がミュンヘ

ンヤ、ハイデルベルヒ等に居られたら夫こそキツト独逸の巡查に捕へられて御座るに相違ない。春風秋雨鳴呼冀くは御健全なれと祈るので有る。斯くして日本では今回の戦争でも何処までも律儀一法で国際法とやらを馬鹿正直に遵奉して青島の捕虜の外は一人の独逸人をも捕へたと云ふ事を聞かぬ。只怪しい奴丈は国外へ放逐したのみで有る。然るに夫に反して独逸では約百余名の同胞が八月十九日の朝からまだ最後通牒の期間内に早くも伯林初め各地で捕へられ、監獄に入れられ普通の囚人以上に酷遇され、馬二頭の室へ人間四人と云ふ割合で藁の上に寝かされ、甚しきは練兵場の野天で三日も恐るべき野宿をさせられ（東京慈恵医院出身の小田部君と云ひハルレーで捕へられた人）炎天に労働を科せられ車を引かされた医学士も有る。何れも黒パンとジャガ芋のスープで八十日間露命を繋いだのである。又埃太利では只二人の日本人（僕の外に福岡の人で木戸〔城戸〕と云ふ言語学研究的私費留学生）を六七ヶ月の長き間抑留し酷遇したので有る。此の木戸君と云ふは維納で捕へられ八月末に既に此の収容所で多くの露人、セルビヤ人と一所に激しい労働をさせられ可愛相に二度も吐血した人である。心ある人は何卒此辺の対照を能く考へて貰ひたい。

話題一転、僕等はその日其の監督庁に姓名、年齢、宗教、等簡単な取調を受け番号を付けられ（僕のは四千八百二十五番で有つた）直にガタ馬車に乗せられ二名の歩哨に連れら

れ、人家もない、山もない、見渡す限り物淋しい田舎道を北へ北へと進み四五時間の後、とある小さい村の端の森の傍らにある所に来た。茲はイルマウと云ふて矢張古城の一部で周囲は深い壕で限られ、少々の松杉の木の外は何れも枯れた木が五六本悄然と立つて居る。四辺は荒田計りて見渡せば地平線を限りて遠く独逸のバツサウに連り南は近くドナウの流れが横はり、東北はベーメンに接して居る。見るからに淋しさうな所である。墺国政府は捕虜の逃げ出さない様にわざと斯く鉄道もない淋しい片田舎を選んだので有る。城は五百年前の建築で、最新には千八百七十年かの匈洪利の革命の際囚人を捕へて此の城の内て首を切つたさうである。壁は落ち垣は壊れ、窓は破れ見るも惨澹たる古い建物の内に約五百人の対独敵国人が収容されて居る。此の外まだ収容所は五六ヶ所有るとの話、前記の木戸君と云ふのは他の収容所に居つたから僕は終り迄遇ふ機会がなかつた。是丈の人数を二人の士官と五十余名の番兵とで昼夜嚴重に警戒して居る。室は五階級に分れ戦時中駐墺米國大使の保護の下に有る国民即ち英、仏、日、丈は一番上等（此処での）の室に入れられ粗末な荒削りの木で組合した寢台に藁床を引いて起臥する事が出来て、一室凡そ三十人程居つた。然し其他のスペイン大使の保護を受ける露、塞、モンテネグロ人などは見るも哀れな待遇を受けて居る。最も彼等の多数は露領ポーランド人及ジュデヤ人の下等労働者で随分汚ない奴計りで有るから、致し方

もないが、其の酷遇されて居る事は丸で豚同然である。大きな穴倉の様な所に小さい窓が只一つ有る丈で、昼尚暗い恐しい湿気の出る陰気な一寸覗いた丈でも臭くてムカムカとする様な室に大勢の人間が一枚の薄い汚れた藁床を引いてゴロゴロと魚河岸の鮪の様に臥つて居る。頃は十一月の末で此辺はモウ雪が盛んに降り、恐しく寒いが各室とも火の気は一切無い。夜は薄暗いカンテラの様なランプが一つ吊られてボンヤリと八月末以来捕えられ拘禁されて粗食と不潔の生活の爲め幽霊の様に瘦せて甚だしく青白くなつた人々の顔を凄く照している。丸で地獄の様子である。初めて着いた晩僕は一寸此の室を覗いた丈でゾツとしたので有る。彼等は斯くも汚い所に入れられ運動も不足し加うるに食物も腹一杯喰う事が出来ぬで有ろう。豚は汚いが喰う丈は充分喰わして居るから是等の露人塞人等は蓋し豚以下の取り扱ひを受けて居る訳だ。食事及凡ての規律は城全体同様で朝は七時起床で有る。其辺の冬の七時はまだ真暗いが其内を何れもゴソ／＼起き上り床を仕舞つて井戸へ顔を洗ひに行くので有る。歩哨は銃剣を持って各室を巡廻して大声にアウフ／＼と廻るので有る。露人や塞人などは少しでも愚図／＼して居ると歩哨先生遠慮なく靴で頭を蹴つたり、銃の尻でなぐるので有る。八時になると各室で一番気の利いた独逸語のよく出来る奴から命ぜられて居るチンマーコンマンガント（室長）が大声にメナージ／＼（食事）と怒鳴る。すると各室の順番で全員何れも手に手に食器

を持つてゾロ／＼二列で静に厨部屋へ練り込む。厨部屋の内には矢張捕虜の内から選ばれたコツクが白い料理人服を着て小さい柄杓で一人一人に一杯宛の食事を与える。其の傍には士官一人歩兵五六人立番して監督して少しでも騒いだり何かする奴は直に引捕へ一日食事を与へず水と黒パン計りの罰に処するので有る。食事の献立は朝は砂糖も牛乳も這入つて居らぬ、黒いコーヒー一杯、夫に鏡餅の様に造つた黒パンの四ツ切れ（アインフィヤテルと云ふ）を一切れ、此のパンが驚くべし一日分のパンで有る。少食の者でも一度に喰ふて仕舞う様な小さい切れが一日全体の分と定めてあるから大男の露人などが腹がへるのは無理はない。昼はジャガ芋や其他野菜のスープ、晩も同じ事で有る。只日曜日丈には申訳の爲め小指程の肉が二切れシヨンボリと浮んで居る。其の黒パンなるものも恐しく粗末で沢山藁が這つて居る。十二月以後は独逸、奥大利は連合軍の爲め兵糧攻めに遇つたからパン粉が不足し一般住民さへ内務大臣の訓達で白いパンは一切嚴禁、戦時パン（クリーグスプロート）と云ふ黒い／＼ジャガ芋の粉が沢山這つて居るのを喰ふ位だから捕虜に与へるものなどは恐しく粗末で迎も口に入れて居袋迄送る事の出来ぬ様なザク／＼したものである。夫も其筈此処では全員に与へる食料は物価の高い今日僅か一日分五十ヘラー（日本の二十錢）位の予算だから迎も祿なものは呉れない。而して此の食料が支弁し得ぬ者は労働を課するので有る。何れも歩哨の銃剣の下で

木を割つたり、石を運んだり、靴屋は靴を作り、大工は盛に木を削つて居る。それでも役人は好んで拘禁者を罰した。或る若い露国のオデツサ生れの男で先年迄トルストイ伯の下僕をして居つたマックスと云ふのは、一日附近の村で労働中其家の主婦に談話した際労働が激く食料が少いから腹がへつて困ると一言こぼしたので主婦は氣の毒がつて「ケーゼ」や「ウユルスト」などを沢山呉れた。其の話を歩哨が聞いて帰り早速監督の士官に告げると憐むべし此の男は早速罰せられ、一日普通貰ふて居るパンの四つ切れさへ二度分しかない位少ないパンを、其日から減食せられて一日八つ切れ（アインアハテル）とせられた。そしてメナージのスープも止められ三日間可愛想に八分の一の小さいパンの切れと水計り飲まれたので有る。其他一寸した過失でも露人や塞人は直ぐ歩哨に引き立てられ地下の暗い監禁室^{アレスタヤ}へ投げ込まれ一日間絶食させられるので有る。斯かる有様で有るから勢ひ多くの病人が出来る。其の手当が又恐しく滑稽なので有る。僕等の室の隣が小さい一寸サツパリした室で有る。それが病室（マローデンチンマー）となつて居る。毎日午前九時と午後三時の両度に矢張捕虜の中のセルビヤ人のドクトル先生（維納大学の医科生）が診察されるので有る。所が此の先生聴診器は勿論検温器もない、又薬剤もない。薬は誰かゝ偶然一瓶のアスピリンを持つて居つた。検温器は幸ひ僕が持つて居つた、（僕は此の検温器で約二百人位の熱を計つたので有る）だか

ら毎日病室が初まるとセルビヤのドクトルが主任で僕は先づ助手と云ふ格で働いた。九時が鳴るとゾロ／＼毎日数十人の患者が診察を受けに来る。すると先生先づ診察して次に僕が熱や脈を計る。所がいざ薬となるとドクトル先生毎日／＼刊を押した様に病症の如何に係らずテグリツヒ、ツワイマール、アスピリン（毎日二回アスピリン）と云ふてアスピリンをやる。風邪を引いたウン、アスピリン、腹が痛いウン、アスピリン。最も可笑しかつたのは歯が痛いと言ふ病人にも相変わらずテグリツヒ、ドライマール、アスピリン。是が医学に於ては実に世界第一の名手とインスチチュートを持って居ると常に誇つて居る維納医科大学を去る事僅か二三十里位の近距離で有るから其の対照が実に面白い。僕は余りの事に後許されて城を出た時紀念の爲めに検温器は此の病室に寄附し区医（Benzkartzl）のドクトルに厳しく忠告した。すると一月になりて可なり完全したメジカメント（薬剤箱）を送つて来たさうである。然し区医は決して来ない。相変わらずセルビヤのドクトル先生である。この滑稽なる病氣の手当を見て僕はふと面白い記憶を呼び起した。夫れは僕が明治四十二年教習として支那四川省成都に居つた時一度夏休みに西藏境の打煎爐附近に旅行して、或る晩其辺に住んで居る蠻子と云ふ野蠻族の住んで居る所に泊つた。凡て此の辺では住民が皆日本人とさへ見れば必ず醫術の心得が有り、薬を持つて居る者と思ふて居るらしい。従つて僕も其晩又々村長の様な奴か

ら倅が永々齒の病氣で悩んで居るからドウゾ日本大人薬を呉れんかと云はれた。所が既に諸方で此種の無心に出遇ひ持合せの仁丹も宝丹も皆尽きて居る時分だ。然し此処で全くやらないと云ふワケに行かぬ。相手は恐ろしい蠻子の酋長である。大に困つた末一計を案じた。即ち靴から齒磨き粉のライオン袋を取り出し、私かに少し紙に包み夫に持合せの薄荷を沢山入れて立派な薬を作つた。其の手際は蓋し丹波薬学博士とても及ばない。斯くて出来上がったものを大きな布袋に入れ大日本神薬と大書して呉れた。使は喜んで帰つたがどうも僕は不安心でならない。万一不結果に陥ると相手が相手だから恐しい。兎に角長居は無用と翌朝まだ暗い内に護衛兵を督して早々出発して夜明頃には五六里も逃げ延びたと思ふ頃、是はしたり後から騎馬の蠻子がホー／＼と云ふて追馳けて来る。ソリヤ来た、一件がバレッタに相違ない、早く逃げろ／＼と轎夫を促したが相手が蠻子で有るから轎子担ぎの苦力も兵隊も不人情に三十六計を極める。取残されたは僕とボーイの支那人丈である。是迄と僕は覚悟して短銃に実弾を込めて来たら一撃と待て居ると蠻子の使者は馬から飛び下り僕に向て三拜九拜、何か書いたものを差出すから読んで見ると、昨夜大人が給する所の大日本神薬効能顯著なる事天の如く神の如し愚息患ふる所の百年の齒病一朝にして癒へたり、豈謝せずんばあるべけんやと来た。そして御礼の志と云ふて大きなハムを五本、羊皮何枚、鶏何羽、なか／＼大した贈物

だ。歯磨き一服では是丈の代物を貰へば損はせぬと笑ふた事が有る。今此処に居る捕虜先生の病人も余り此の支那人と違はないので有る。僕等の居た英仏人の室では何れも多少の銭は貰つて居るから自弁で食物を買ふ事が許される。官給品は皆他の露人などに呉れてやる。其代り室の掃除やベットの世話や洗濯物などして呉れた。且米国大使館から度々シャツやハンケチなどの見舞が来る。僕が唯一の日本人だから役人も多少寛大にして呉れた。殊に露人はヤポニヤ（日本人）と云ひ中には日露戦争の際捕虜となつて松山に居た連中が居つて日本では非常に優遇されたが奥国はヒドイと憤慨して居る。或る日年若い立派な露人と庭の散歩中話し初めた。彼が云ふには独逸で捕へられた日本人は既に十一月中旬頃に皆米國大使の尽力で放免されたさうだから君も長く此処に居りはすまいと告げて呉れた。段々話して見ると此男はセントピーターズブルク大学の経済科の出身で今は「ノボへ、ウレミヤ」新聞の維納通信員として来て居つたので有る。千九百六年正月露都で起つた一揆騒ぎの時はカボン長老の参謀となり大に働きコサツ兵の爲め腕を打たれたさうだ。長老の使者として二度日本のアカシ大佐（蓋し参謀本部の明石中将の事ならん）にも遇ふたと云つて居る。明石中将は其当時露國の革命党を煽動する任務を帯びてストツクホルム（瑞典）に来て居られたさうだ。僕は此の男アレキサンダー、ミロウツチの話即ち独逸では同胞が既に放免されたと云ふ事に就ては果

してどうかと思ふて居つた。然し其の翌日一枚の絵葉書が僕に來た。夫は同窓の神林隆淨學士が瑞西のチユリツヒ市から親切にも送られたので有る。文面では自分は十一月初めハイブルロンから放免されたと書いて有つた。僕は多く絵葉書を貰ふたが此の時程嬉しく難有く思ふて読んだものはない。丸で懐しい友達に親しく遇ふた様な気がしたので有る。後で聞けば我黨の内独逸に居た宇井、池田の両學士は素早く脱出し、殊にコンバスの長い池田君は泡蓋ストラスブルグを逃げ出し瑞西へ來られたので有る。然し氣の毒なは温厚なる神林和尚泰然自若として捕へられハイブルロンに約八十日の御修行、十一月中旬君はまた捕へられ當時のパナ帽を被つた儘白雪皚々たる瑞西に來られたさうだ。僕は同君の葉書を読み、更に翌日手に入つた新聞で彌々在獨の同胞が許された事を知り、心私かに喜んで居つた。城では毎度天氣の好い日には一同城外の散歩を許して呉れた。午後一時頃城門から異形の人種がゾロ／＼と出て来る。前後は敵めし銃劍の歩哨に警衛されるので有る。途中の会話は実に各種の言語が話される、英、獨、仏、露、セルビヤ、ポーランド、チエヒツシユ（ボヘミヤ語）、マジヤーリツシユ（ハンガリーの語）等八ヶ國の各特色有るのが話される日本語も数に入れたいけれ共相手がないから独り言云ふ訳に行かず残念ながら使はずに居つた。日曜の夜は特に夕食後一二時間自由が与へられる事が有る。すると各國のダンスをやる。是がなか／＼面白い。捕は

れた五百余人の抑留者は何れも仲が善く相互に助けつ助けられつ、実に和氣霽々たるものが有つた。然し一番苦しかったのは食物で無い、僕等は自弁で相応のモノが喰へた。寒さでもない、僕は幸サルツブルク市長夫人の贈物の毛布や羽枕の御蔭で少しも苦痛は感ぜなかつた。若し是が無かつたら恐く寒さの爲めきつと病氣になつて居つたかも知れない。是を以ての故に汚い毛布の包みを後生大事として花の都の巴里三境界持つて来たのである。是は無論日本に持つて帰つて紀念にする考だ。が一番困つたのは虱の攻撃で有る。僕等の部屋は比較的清潔で有つたが何を云ふも風呂に入らぬ人間計りであるから御恥しい事ながら一日一回は誰も彼も庭で虱狩りの演習イヤハヤ迷惑千万の至りで有つた。僕の此の恐しい収容所たる城の生活は十日間で済んだ。十二月一日に監督将校から一所に来た三名の英人、二名の仏人、及僕が呼び出され、今日からコロニーに行ても善いとの許可が出た。コロニー即ち殖民生活とは捕虜の中で相応の身許で有り奥国に相当な保証人も有り且自弁で生活し得る者に限り(勿論英、仏、日本人に限り)政府が指定した土地に官憲の監督の下に下宿生活する事で有る。是は非常な特典で此の生活は少しも維納の下宿生活と異なる所はない、只一日二回土地の憲兵隊へ顔出しすれば後は飲むも食ふも、寝るも起きるも自由である。多くの連中は盛んに此のコロニー行きを運動するが百人に二十人位しか許されぬ。恐らく僕の許されたのは米國大使や親友口

ト少佐の骨折らしかつた。是でやつと地獄の一丁目から脱出して人間並の生活が出来るようになった。(未完) (以上、『東亜の光』第十卷第八号)

幽囚中母の計を聞く

十二月一日午後僕等五人は馬車を駆つて大雪を冒してドナウ河畔の小さい町に行つた。其処は「カウチエン」と云ふて人口千計りの小さい宿場宿場で有る。既に僕等に先ち凡そ廿余人の英、仏人が同じく許されて住んで居つた。中には夫婦者、子供を連れて一家を挙げて住んで居るものもある。英仏の商人なども居つた。僕はタイムスの記者と仏國の伯爵と三人で一才した二階の室を貸り食事はホテルへ喰ひに行つた。土地の人も至つて朴直で決して僕等に乱暴する様な事はなく少なからず同情して居つた。従て此の生活は呑気なことで有る。一同只一寸憲兵派出所へ出頭して直ぐ帰つて来るので有る。他は万事勝手放題で有るから僕は幸に毎日伯爵を捕へて仏語の稽古夜は食堂で落合ふ英人連が断へず聞く講演会を聞いて居つた。其の講演会なるものがなか／＼面白い。演題が色々出る、何れも振て居る。曰く「カイゼルの眼に映じたるサーエドワードグレー」とか「アルサスローレンの眞の持主は果して誰ぞや」とか「戦後に於けるカイゼル髯の価値如何」或は「奥大利、匈洪利の分裂の時機如何」なんて頗る面白い。食堂は十時迄許されて監督の爲め断へず歩哨が巡廻するがホテルの女将なか／＼気が利ひて居つて早速一二杯のビールで

何時も彼等を買取る。だから時に十二時迄議論に花が咲く事があつた。此の時分僕は前期の木戸君が血を吐いたと聞いたから幾度も区知事に嘆願書(ゲズーフ)を送つて一度見舞にやつて呉れと頼んだがドウシテモ許されなかつた。又僕は度々手紙を米国外使に諸方に出して何故奥太利丈で二人の日本人を斯く迄長く引張るかと尋ねて居つた。

一月の初め維納より米国外使館の参事官スミス氏といふが英仏人の視察兼見舞に來られた。其際僕を呼んで君等の件に就ては大使以下尽力して居るから遠からず解放されるだらうと話された。何分世界の列強の内、局外中立を取つて居るのは米國と伊國丈であるが伊國は第二流だから奥國でも独逸でも此の米國に対してはビク／＼して居る。独軍は毎度華盛頓の白舎カイトハツに電報を送り御機嫌を取つてゐる。ヤレ仏兵がダムダム弾を使ふた、ヤレ英兵は國際法違反をやつたとか何んとか云ふては大統領ウイルソンに不平を訴へて居る位で有る。従て米國は流石のカイゼルも少なからず恐れて居る。そして米國の言ふ事なら何んでも聞いて居る。夫故米國大使館などが視察に來ると官憲共はチリチリして恐れ入つて居るので有る。

斯かる工合で一月も暮れの廿六日となりた。其日は朝からドンヨリした天氣で、午後からは吹雪で有る。不愉快極まる日で有つた。夕刻僕は一封の手紙を受取つた。夫は米國大使館から來たので有る。占めた、長い事待て居つた大吉報に相

違ふと思ふて取る手遅しと開封して見ると、抑も是は又何たる事ぞ、最大吉報と思ふて居つたのは僕の全生涯を通して忘るべからざる大凶報で有つた。暫くは僕はボツとして仕舞ふた。アルプス山麓の修道院から憲兵に拘引された晩もザルコブルクの古城に愴い月を望んだ時も又後の収容所たる古城に入れられ毎夜銃剣の下に眠つた時も何事も男子の心膽を練るのだと覺悟して、存外平氣で過して來た。従つて別れ悲しくも何んともなかつたが今此の一月廿六日の手紙丈には実に泣かざるを得なんだので有る。否人の子として泣かずに居られぬので有る。其の報知と云ふのは一通の英文の手紙、是は米國大使の書記官から別紙の手紙と日本の新聞の切り抜きが來たから送る云ふ丈で有る。他の一通の手紙には朝日新聞の切り抜きが付て居る。即ち羅馬に居られる外務留學生井上靜一氏(僕の知人に非ず)が親切にも母の死を報じて來られたので有る。即ち其の手紙はタイプライターに打て有る次の文句で有る。

Lieber Herr Fujii! Ich bed[er]e sehr Ihnen mitzuteilen, dass Ihre Frau Mutter aus Krankheiten am 4ten Nov. ruhig gepasst hat. Ihre Schwester bittet mich Ihnen ratzugeben, schnellst nach Japan rückekehren, wenn es möglich ist. Das Reisegeld wird bald zur Japanischen Botschaft zu Rom befördert sein.

Ich bin,

新聞は「悲しき奇遇藤井文学士と敵国博士」と題して僕の母の死と僕の知人独逸ブレーメンのシユミット博士（当時仏教研究の爲め夫人同伴京都ミヤコホテルに居れり）に関する極めて同情ある記事で有つた。其の報知が延びに延びて約百日後の一月廿六日、場所も有らうに捕はれの哀しい生活中淋しき異郷の冬の夕べ、人の子として此の上なき悲報に接したので有る。僕は一晚泣き明した。そして孤燈の下窓外に吼ゆる嵐を聞きつゝ、万感交々起りて禁ぜなんだ。思ひ起せば大正元年九月廿五日と思ふ、母はワザ／＼神戸迄見送つて来られた。そして一度桃山御陵が拝したいから連れて参つて呉れとの注文に是が母子一生の最後の旅行になるとは知らず僕は母を奉じて伏見に行き桃山御陵を拝せしめた。そして帰途京都西大谷に詣でた。夫は恰度其年が亡き父の廿五週年に相当するから納骨して有る大谷本廟にも最後の別れを告げた。僕は此の時千萬無量の感が湧いた。父の逝きてより既に廿五年、我儘者の僕は母を泣かして計り居つた。然も今になりて依然何一つ学界にも教界にも尽した事無く、否常に先輩や知友に迷惑計りかけて居るので有る。僕等母子の廟前に合掌した時納骨堂に安かに眠れる父は何と思ふたかと、云ふべからざる感がした。そして翌日母は杖にすがりてわざ／＼僕の乗船常陸丸に来て母はモウ汝の帰る迄存命の見込なしと甲板上に最後の別れを告げ、朝恩を忘る事なく又必ず仏祖の恩を忘るな

と最後の訓戒を垂れ一封の毛髪を僕に手渡された。是は僕が帰朝の途次出来るなら印度に立寄り仏陀迦耶を参拝したいと話して居つたから母はセメテ一片の髪でも大聖の聖地に納め呉れとの希望で有つた。嗚呼此の常陸丸甲板上の別れが彌々最後の別れとなつた。常陸丸の名はそして僕にも忘るべからざる悲劇の一つとなつたので有る。

シユミット博士—米國大使の書状—放免

一月も斯くて涙の内に暮れた。此の地方の冬は実に愴い様な天気で毎日／＼雪又は雪まじりの雫で晩は何時も吹雪の嵐で有る。太陽は殆んど一ヶ月一度も顔を見せない。山もない茫茫たる平野のみで只二三の枯樹が所々にシヨンポリと立つて居る。只聞ゆるものは窓外に吼ゆる風の音と遠く流れて居るドナウの水の咽ぶのみで有る。

僕は此頃は毎日仏語の練習と夜は快活な英人共から色々の話を聞かされた。別けてデピス博士は痛く僕に同情して呉れベ—シエンス／＼を常に繰返しては僕を慰めて呉れられた。斯くして辛くも日一日と暮らしたので有る。而して毎夜夢は遠く故郷播州の天に飛んで亡き父母を想ふて居つた。二月の初めになつて前期シユミット医学博士が日本から帰られた。博士は僕が留守中にかけて居いた僕の手紙を読み僕の近状を知り非常に驚かれたので有る。ソシテ沢山の小包郵便を呉れられた。博士は先年僕が維納に居る時恰度其当時伯林に居つた千葉秀甫君（君は聞けば昨秋ベルンで悲惨な最後を遂

られたさうだ、実に御氣の毒で有る）から僕の事を聞いてわざ／＼維納に來られたので有る。年六十を過ぎた老人であるが日本語を既に十年も学び仏典の研究もなか／＼深く今度主として真言密教の方面と仏教美術の研究の爲め日本に行きたいから其方面の話をして呉れとの注文で長らく往復して居つた。博士はなか／＼の博識で真言宗の教義にかけては僕は足許にも寄れない。英、独、仏の仏教書は勿論驚いたのは漢訳の御経などドン／＼読まれた。ヤレ金剛界がどうの胎藏界がどうの大日如来がどうやられたの曼荼羅がどうかしたとか盛んに質問され僕は非常に面喰たので有つた。博士は欧州に於ける何れの仏教の会にも関係しケルン博士デビス博士なども親密で有る。独逸プレスラウに有る仏教会 (Buddhi. [st]sche Pali gesel. [] schaft) および倫動 (倫敦) の大英仏教会 (暹羅の皇帝が総裁で博士は委員で有る) にも色々尽力して居られる。夫人同伴で丸一年日本に居られ、二月に歸られてから非常なる同情を以て僕の爲めに尽された。僕の捕虜生活も前期の軍人や同博士の御蔭と、米國大使の尽力で漸く無事に済んだので有る。偕、三月十日になつて彌々米國大使から書留で左の手紙が来て引続き外務大臣ブリヤン男の名で十五日、僕等は目度く解放されたので有る。

Dr. K. Eujii [Fujii]

Kanzen. Nieder Osterreich. [Kanzen. Niederösterreich.]

Sir. I have been informed by the Foreign Office that instructions

will be immediately issued to the proper authorities to release you and grant permission for your departure to Switzerland, where please be good enough to report without delay to the nearest Japanese Consul and to request him to be good enough to notify this Embassy of your arrival.

I am, sir your obedient servant

For the Ambassador

U. Grand Smith. [Grant-Smith]⁽⁵⁾

大正四年三月十五日午前十時僕は彌々解放されて此の思ひ出多きカウチエンの町を去つた。別れを惜んで呉れる英人、仏人と堅く握手を交換して無事維納に引上げの途に上つた途中でもう一度監督官庁を見舞つた。区知事は俄かに御世辭能く収容中の待遇は氣に入つたか、何卒歸られたら独逸人種は決して日本人を心から敵視せぬ、惡むべきは英人で有る事を伝えて貰ひたいなど云つた。此処で初めて前記木戸君に出会ひ二人携へて汽車で維納に引き上た、僕は最後に此度の戦争の爲め独逸でも奥國でも捕虜となりし同胞の爲め如何に米國政府が尽力したか又独人の如何なる人が骨を折たかと云ふ事を簡短に述べて本編の最後とする考へで有る。

米國大使館―大学を見舞ふ―国境通過

昨年の八月十九日以来独逸では百余名の同胞が他の対独交戦國の民と同じく捕へられ何れも二三ヶ月、長きは四五ヶ月も牢屋住いさせられた。又奥國では僕等二人が七、八ヶ月の

捕虜生活をしたが何れも戦争が済まぬ間に解放された。是は全く我が天皇陛下の御威徳にも依るが一つは駐澳及び駐独米國大使及華盛頓政府の尽力で有る。読者はどうか米國政府の好意を記憶して貰たい。勿論日本で何人の独人も捕へなかつたと云ふが原因で有るが。若し米國使臣の猷身的の尽力が無つたら今頃はまた幾多の同胞が牢屋で泣いて居るか知れないので有る。正直に云へば僕等は多少米國大使に対して不平で有つたと云ふは独逸では既に十一月の末迄に大部分の同胞が免されて居るに、僕等二人を何時迄となく引張つて居る。僕はまだコロニー生活の特許が与へられたが木戸君に至つては相當な金を持ちながらとうとう仕舞迄収容所にいちめられ居つた。が然し一度、維納に帰つて凡ての様子を知り如何に米國使臣の感謝に堪へざる同情が有つたかが明になつた。

僕等二人が氣もイソ／＼と三月十六日の夕維納フランツヨセフ停車場に着くとプラットホームに降りるなりバラバラと僕等を取囲んだ私服の男が三人有る。彼等は丁寧な会釈して曰く拙者は維納米國大使勤務の私服巡查で有る。大使閣下の命に依り万一の変を慮り諸君を護衛するもので有ると云ひ早速自動車を呼んで呉れ、同乗して僕等を大使館附近のホテルへ運んで呉れた。翌日も迎へに来て呉れたから僕等は服を改めて大使館に伺候した。行つて見ると驚いたのは大使館の御繁盛、門前は朝の九時頃で有るに既に自動車馬車で一杯幾多の応接室はモウ一杯の客で有る上に玄関前には幾十人となく

詰めかけて居る。聞けば戦争前は至つて閑散で大使以下四名の書記官で暇で有つたさうだが今や本國より臨時に人を増加し参事官以下廿三名、臨時雇の維納人十名、五台の電話は終日断へ間なく鳴つて居る。幾十台のタイプライターは小銃戰の様子に打たれて居る。大使館へ一日に来る電報郵便を合せて百通を下らず、又た大使館より出す郵便物郵税丈が一ヶ月八百クロネー（本邦貨三百廿円）に上るとの話、夫も道理で有る。今や駐澳米國大使は英、仏及日本の権利、利益を代表せる事とて幾万の英仏人の軍人の捕虜、幾千人の抑留者、及其家族の世話実に目が廻る程忙しいのは無理はない。僕等が行つた時なども若い婦人が泣きながら盛んに何処に私のハズバンドが居るのであるかドウカ救ふてやつて呉れと、攻め立て捕へられたる若い書記官などは迷惑千万の顔しながら納得する様に説明して居る。イヤハヤ其混雑たら無い。此の大騒ぎの内を参事官の首席たるスミス氏は恰度大使がまだ来て居らぬからとて代りて僕等二人を階上の自分の執務室に案内し戸を堅く閉めて錠を降し棹上電話の受話器を外づし凡て外界との交通を絶ちヤラ椅子にかけて徐ろにウエルミスター藤井と初められた、参事官は曰く定て君等の事件が長びいて不平で有るだらうが僕の方では決してネグレクトしたのでは無い、大使以下多忙の内を出来る限りの骨を折つたのである、自分は其の主任としてベストを尽したので有る、マー此の一件書類を見て呉れ後で、と差し出されたのは約百枚に余

る公文書、電報等の写しで有る。其の内には米回国章の付いたものや菊花の御紋章の入つたのは何れ日本から出たものだらう。実に色々のものがある。参事官曰く、抑も君等御二人の解放運動も初めたのは十月十五日で有る。ソシテ遅くとも十二月初め迄には決着を付ける考の所奥国政府の呑氣驚くべしなか／＼埒が明かぬ。其内独逸では全部解放したとの報知が伯林米国大使館から来たから僕の方も気が氣じやない。幾度か大使が自働車を外務省に飛ばされたが一向要領を得ぬ。日本政府の御依頼を受けて居るのは伯林の大使も茲の大使も同じ事だ。其内不幸なる事は一月上旬になつて前外務大臣ベルヒトールド伯が外交問題で皇帝及陸軍大臣と衝突して辞職した。夫等の為め又々本件は延期され一月末になつても解決が付かぬから二月の初めから毎日電話で新外相ブリヤン男に迫つたと。此時参事官は卓を叩きエプリーモーニング電話をかけたと云ふ其のエプリーに恐しく力を入れて話されたからまだ其の語調は僕の耳に残つて居る。然しまだ埒が明かぬから仕方なく華盛頓政府へ電報をかけて指揮を仰いだ。そして國務卿ブライアン氏からは非公式に奥国首相スチュルク伯に談じて貰ふた。夫でも解放せぬから最後のものとして是を出したと示されたるは仏文で書いた駐奥米国大使から奥国首相ブリヤン男に宛てたヒドイ手紙で有る。今大意丈を私訳すれば、

在奥国抑留中の日本留學生二人の解放に付き本大使は華盛

頓政府の命に依り国際法を遵奉して交渉幾月に及ぶも未だ其結を告げざるは本大使の大に遺憾とする所なり。茲に敢て告ぐ来る三月一日を期して尚確答を得ざるに於いては本件に關して本大使は便宜の手段を取る事の自由を有す。

千九百十五年二月於ヴェインナ戰時中大日本皇帝陛下の御囑に依り当該国臣民の權利利益を代表せる

北米合衆国大使 ジ、シ、ペーンフィールド

是には流石呑氣の外務省も肝を潰し早速僕等を放免したらしい。其他一件書類の中にはブライアン氏の手紙も有り羅馬駐在の日本大使林權助男のものも有り瑞西の名譽領事からは十幾通かの行届いた手紙が来て居つた。是を見て僕はナール種(程)と得心したのである。多謝す米国政府!!! 参事官は尚も語を次ぎ何卒諸君が帰られたら日本上下の公衆に告げられたし。米国政府及アメリカンは日本人に対して決して／＼日本の或人が云ふ如く悪感情を持つて居るものに非ず。否燃ゆるが如き同情を持つて居るので有る。熱きシンパシーとフレンドシップを持つて居るので有るから此の辺を善く伝へて呉れと云はれ又君等は旅費に不足はせぬか入用ならば幾何でも貸して上げると云はれた(最も木戸君は既に二百クロネー程見舞ひを貰ふて居るので有る)又何か欲しいものが有れば世話して上げると云はれ最後に参事官は是非君等の健康を祝すべくジンナーが上げたいから今晚宅へ来て呉れと迄云はれた。然し僕等は其の厚意を深謝して金も御馳走も双方御辞退

申した。ドコ迄も親切な参事官は万一途中で又間違が有つてはならぬと早速次の如き米国大使館の旅行券を出して呉れた。これは実に立派な紙で上に米政府の紋章と国印がついて居る。

Es wird hiermit bestätigt das[s] Besitzer dieses Dr. Ke [i.]jo Fuji ein japanischer untertan ist und dass der amerikanische Batschaftern [Botschafter] in Wien für ihm als solchen um jede erdenkliche Gefälligkeit [Gefälligkeit] Seitens der öffentlichen [öffentlichen] Beamten bitet, damit die betreffende Person frei und unbehindert seine Wege verfolgen darf.

N. G. Smith. [U. G. Smith] Botschaft[s] rat.

Im Auftrag des Botschafters [Botschafters] der Vereinigte [n] Staate [n] vor [von] Amerika, Zur Zeit mit der Wahrung [Wahrung] der Interesse der Regierung Seiner japanischen Majestät betraut. ⁽⁶⁾

参事官は尚電話で外務省、警視庁、鉄道監督局、陸軍省等呼び出し大使の名を以て一々二名の放免されたる日本留学生が維納西停車場を發してザルツブルク、インスブルク、ブレゲンツを経て瑞西に向ふ筈だから決して途中故障の無い様に保護してやつて呉れと頼まれた。僕は此の手厚き保護に満足して館を去り、帰途久々振りて大学を見舞ふた。驚いた、全建築は全部赤十字旗が翻り僕が仕事して居つた馴染の東洋学部は薬局に變じて居る。書庫は有るが全部空となり薬瓶が

入つて居る。一昨年冬以来苦心して作りシユローダー教授にも世話になつて全部出来上がつて居つた四十二章経の独訳を初め僕の他のアルバイトなどは影もない。段々聞いて見るとソナナ書類なんかは冬寒いから小使(陸軍の)などがストーブで燃して仕舞たのだらうとの話。残念でならぬので有る。去つて心理学会の有つた家に行き聞いて見ると先年僕に契約して福来博士の著作の翻訳を頼んだウルコスキーと云ふ人は招集されてセルビヤの方へ行つたと云ふ事又は分つて居るが生きて居るか死んだか分らないとの話。重ねの不幸に僕はガツカリしたので有る。泣き面に蜂とは蓋し此の事かと思ふ。

十七日夕漸く僕は行李を調べ縁故浅からぬハプスブルクの首府維納を去つた。西停車場のプラツトホームには早くも二名の米国大使館書記官が先着して僕等を待つて居られた。凡て準備が済むと書記官の一人は駅長室へ行かれそこから官用電話で又もや沿道の主要駅長を呼び出し又停車場司令官を呼び出し一々僕等二名の安全なる旅行が出来る様途中で異変なき様悉く話をして居られた。是は誠に大切な事で独逸では現にクレーフエルト(獨逸國境の停車場のある町)で免され瑞西に向ふて出發された北海道札幌病院の副長植村医学士などは途中「フランクフルト」や「ウルム」などでわからず屋の停車場官吏の爲め下車させられ四五日間も又もや暗い所で過ごされた事が有つたそうだ。僕等は大使館の此行届た注意の御陰

で沿道度々汽車に調べに来た私服巡查や憲兵も他の旅客は恐しく嚴重に調べたに拘らず僕等を見てはニコニコ笑ひながら君等は調へる必要ない、御安全なる御旅行を祈るなど御世辞を云ふて通して呉れた。汽車は思ひ出多きザルツブルクを過ぎチロールに入りアルプスの山間を走り走り遂にインスブルクも過ぎ奥領最後の小駅コンスタンツを過ぎ小さい鉄道橋を走り十八日午前十一時彌々瑞西領第一の停車場ブツクスと云ふに来た時は僕は思はず万歳と唱へ携へ来りしワインの杯を高く上げて二人ニツコリしたので有る。嗚呼七八ヶ月の歲月短きに非ず又長きに非ざれ共此の間には生前また出会はずる種々の運命に遭遇し色々の経験を得たので有る。然し二人共に至極健全で此の国境を越へて無事中立国たる瑞西へ来たので有るから衷心の歎び実に云ふべからざるものが有つた。停車場の役人を見ても巡查を見てもモウ奥国の鷲の章しを付けて居る者は一人も無い。皆懐かしい赤字に白十字の瑞西の紋章で有る。恐しい猛虎の口を逃れて慈愛なる母の手に抱かれた様な気がした。嗚呼恐しき鷲の章よ、嗚呼親しき白十字の章よ。モウ大丈夫だ、君よ、もう一杯乾杯をやらせ給へとは木戸君のサモ愉快なる乙音で有つた。

チユリツヒに着いたのは午後二時で有る。折柄春雨ししと降りて湖畔は煙つて居つたが何となく愉快で有る。独逸語は話して居るがモウ恐しい独逸ではない。名譽領事ホーゲーリー氏は痛く喜んで歓迎して呉れた。斯くて夕方湖畔のホテ

ルに着き風呂に這入つてホツト息を吐いたので有る。翌日懐しき神林学士の宿を尋ねたら既にベルンに転学されたと聞き又電報で聞き合したら残念ながらももう帰朝されたとの返事で有つた。最後に申忘れて居つたのは独逸で米国使臣の外日本人解放に就き非常なる熱心で尽力したのはライプチヒの製薬会社社長ズースマン君で有る。君は自分の私産全部を投出してでも日本人を救ふてやりたいと運動されたと云ふ事である。

(完) (以上、『東亜の光』第十卷第九号)

【追記】 本稿は、二〇一五年度―二〇一七年度科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「第一次世界大戦期の世界的「人の移動」に関する基礎研究」・アジア・欧州間関係を中心に」(課題研究番号：15K12996、研究代表：奈良岡聡智)による研究成果の一部である。

(1) 本翻刻では紙幅の関係から、明城彌三吉に関する記事(▲子供が可愛で 明城医学士の実姉語る)は割愛した。

(2) 「在仏 藤井慶乗」と記載されている。なおこの回顧録にあるいくつかの日付については、他の情報と照合すると誤記や勘違いの可能性がある。本翻刻ではこの点に関して修正していない。修正後の日付など藤井の抑留に関しては、梶原克彦「オーストリア⇨ハンガリーにおける敵国民間人の抑留・拘禁と解放―日本人抑留者の事例を中心に―」『愛媛法学会雑誌』第四四卷第三・四合併号、二〇一七年、を参照。

(3) 藤井博士 誠に申し上げにくいのですが、かつてオーストリアで日本に寄せられていた大いなる共感は今全くその逆になってしまいました。それというのも、われわれの情理では日本のやり口がまったく理解できないからです。日本のあらゆる軍事教育はドイツ人の指導のおかげであり、日本の将校たちをドイツ軍とオーストリア軍は受け入れていました。ですが、そのお返しに、ドイツが中国の荒地地から花咲く土地へと変えたその植民地を、単に盗むに好機であるというそれだけの理由で、騎士道の欠片もなく、日本は自分たちの先生から奪い取ろうとしています。ウィーンの人々の心建ての善さは貴兄もご存知の通りですが、今後、ウィーンでそういったものにお目にかかる事は無いでしょうし、あなたがかつてウィーンで日本人であるがゆえに寄せられた共感にもはや接する事もないでしょう。

(4) 藤井様 御母堂様が十一月四日にご病気の為、ご逝去されましたことをお伝えいたします。姉君より、もし可能であるならば、可及的速やかな帰国を勧めるよう、とのことでございます。旅費は在ローマ日本大使館が立て替えるとのことです。

在ローマ 井上拜

(5) 藤井慶乗博士

ニードルエスターライヒ州 カウツェン

拜啓、オーストリア外務省より知らせがあり、貴君を解放しスイスへの出国を許可するよう、関係官庁へ即座に指示されるとのことです。スイスでは、最寄りの日本領事館に遅滞なく報告し、貴君の到着を本米国外使館へと報告するよう同領事館へ依頼してください。

米国外使に代わって

グラント・スミス

敬具

(6) 証明書…本書状の所有者である藤井慶乗博士は日本国臣民で有り、在ウィーン米国外使は、同氏のために、関係官庁に、当該人物が自由にその移動に支障なきようあらゆる必要な措置を採られるよう要請する。

大使館参事官 U. グラント・スミス
アメリカ合衆国大使館は、大日本帝国政府の利益・利害保持を代表するものである。